

追悼 谷田貝常夫先生

市川 浩

令和四年二月二十一日早朝、國語問題協議會會長谷田貝常夫先生享年八十八歳にて逝去し給ふ。茲に慎みて追悼の一文を捧げ参らせ候。

私事、谷田貝先生に始めて御眼にかゝり候は、平成八年1996の夏、當時漸く完成の略字なし、歴史的假名遣對應の入力・變換ソフト「契沖」の實地檢分に拙宅に御越し頂きました。直ぐに御納得頂き、同時に同年十一月東京にて開催豫定の漢字文化圏日中韓三カ國の漢字政策を考ふる第三回國際漢字會議の資料印刷・配布の御注文を頂けり。

先生は亦眞言密教の修行を通じて、特に空海の梵字學にも精通なされ、その關係にて我が國の僧契沖に就きても深き關心を寄せられ、當時關西にて吉原榮徳先生率ゐ給ひける契沖研究會とも御聯絡、その關係にて私も附隨して會員二人の同會東京支部を設立せられたり。

此の頃先生は國語問題協議會にも御参加なされ、平成十六年2004以降事務局長を御勤めになり、昨秋會長に就任せられたり。

この間の御活躍の中に特筆すべきものの一つに同十五年2003非營利法人文語の苑の初期業務の開發あり。此の集り最初岡崎久彦、愛甲次郎、加藤淳平、鹽原經央の各氏の發案にて文語の復活を企圖し、之を電網上に投影せむとして、國語問題協議會も此に協力することとなり、先生御自ら電網畫面の設計を實現せられ、更にはそれらの作品の電子出版への道を開拓なされけり。

これら輝かしき御業績を先生は温顔を絶やさず積み重ねられけるも、その背後には長大の資料も瞬時に讀取る竝外れの御力量ありて、その御成果は二冊の御著書『「大學入試」英語長文要約法』及び『大學入試讀解と記述のための現代文要約法』に凝縮しあり。

先生の御生涯は昭和八年早生れの御出生なれば、義務教育後最初の舊制中學東京都立第二中學校（現兩國高等學校）への御入學は終戦の年にて、當に八十年に垂とせむ戦後の日本と共にありたり。

この間我が國文化は一時正しき復興の動きを見するも、經濟バブルの崩潰、地球一極主義の誤解などにて、再び低迷の様相を呈す。この時期に當り先生を喪ふの悲運、天を仰ぐばかりの中、微力を我が國文化の正しき發展に捧ぐるを御誓ひ申上げ、心より御冥福を御祈申上げ候。

（令和四年三月二日受附）